

ガイドライン研究班報告 —ACTFL-OPI 各レベルの具体的特徴を求めて—

荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子

要旨

ガイドライン研究班は、日本語OPI研究会のプロジェクトとして研究活動を行ってきた研究班の一つである。1995年に発足し2005年に終了するまで、人数が減ることはあったが、メンバーが変わることなく 11年間続けてきたプロジェクトである。

プロジェクトの目的は、ACTFL-OPI評価基準が記述式であり、また、定義や具体的数値が示されていないこともあって、わかりにくいとされている各レベルでの口頭運用能力を、より具体的な特徴や数値的なデータを得ることで示していくことである。

プロジェクトの活動としては、中級話者を中心とした具体的特徴を研究することにはじまり、上級・超級話者を中心とした具体的特徴の研究、ストラテジー使用研究を行った。その後、それらの研究から得た知見をもとに、日本語教育への活用として上級話者、超級話者になるための話技能に特化した教科書作成を行った。

【キーワード】 レベル別具体的特徴、準段落、発話内容領域、談話構成、ストラテジー

1. ガイドライン研究班の活動目的

ガイドライン研究班は、日本語 OPI 研究会のプロジェクトとして、1995 年に当時の研究会会員 7 名により発足した。それ以前にも、研究会の活動の一部として、音声データの文字起こしを行ったり、各レベルの典型的なインタビューを探したりするという活動が行われていたが、その作業を 1995 年まで続けていたメンバーが⁽¹⁾ 7 人だったという経緯がある。

プロジェクトとして研究を始めた背景には、ACTFL-OPI マニュアルが記述式で、評価基準の具体的な内容がわかりにくいという面があり、より具体的な特徴や数値的なデータを得たいという OPI テスターとしての要望があった。そこで、2005 年に研究会プロジェクトとしての活動を終了するまで、一貫して ACTFL-OPI 各レベルの話者の言語分析を行うことにより、具体的な特徴を示していくことを目標として研究活動を行ってきた。

その後も、元ガイドライン研究班メンバーの数人と、それまでの研究を通して得た知見からコミュニケーション能力の養成を目指す教科書作成を行ったり、超級話者の条件として重要な要素である抽象性について新たな研究(荻原・齊藤 2008)を続けたりしている。

2. ガイドライン研究班の研究活動

ガイドライン研究班の活動は、大きく 3 期に分けることができ、ガイドライン研究班終了後の活動を第 4 期と捉えることができる。

まず、第 1 期では、初級上～上級下の OPI インタビューテープの文字起こしデータを使用して、中級を中心とした発話の特徴を知るための研究を行った(伊藤他1996)。その結果、単文から複文へ、また、文から段落へと移行していく様子を明らかにし、中級話者

に特徴的な話のまとまり方を「準段落」⁽²⁾と名付けた。

その後、第2期には、メンバーが7名から5名になり、上級一下～超級と、日本語母語話者のOPIインタビューテープを使用し、「発話内容領域」という新たに設けた概念を使って各レベルの特徴を明らかにしていった(荻原他2001、2002a)。主に話のまとまり方に注目し、談話構成について大きな知見を得ることができた。

第3期には、メンバーは3名となったが、全レベルを対象として、ストラテジー使用についての変化の様子を分析し、上級話者のまどろっこしい話し方や中級話者のコミュニケーションのつたなさの原因の一つが明らかとなった(荻原他2002b)。

それに加え、それまでに得られた結果を各レベルで備えている能力という側面だけでなく、もう一段階上のレベルに行くために足りない部分は何かという側面からも捉え直し、各レベルで養成の必要がある会話能力を明らかにしていった(荻原他2003、2004)。

その後、第4期では、日本語OPI研究会のプロジェクトとしての活動は終了したが、同メンバーにより、実際の日本語教育に生かすことを目指し、話技能に関する教科書を作成した(荻原他2005、2007)。

ガイドライン研究班で行った第1期～第3期の各研究に使用したOPIの被験者は、17名(男10名、女7名)で、出身地は、12カ国(韓国3、中国2、イギリス2、マレーシア、ギニア、オーストラリア、インド、タイ、アメリカ、香港、台湾各1、日本2)であった。

これらのインタビューについては、メンバーにより選別されたものであるが、メンバー間の判定の信頼性を統計的に確認し、全体的評価から考えて初級・中級・上級・超級の典型と見られるOPIインタビューを選んでいる。

各研究と対象者数は、下記の通りである。

表1. 主要研究のレベル別対象者人数

研究内容	第1期	第2期	第3期
	中級者対象研究 伊藤他(1996)	上・超級者対象研究 荻原他(2001)	会話教育の指針研究 荻原他(2003, 2004)
レベル初級一上	1		1
中級一下	1		2
中級一中	2		2
中級一上	1		2
上級一下	1	2	2
上級一中		2	2
上級一上		2	2
超級		2	2
日本語母語話者		2	2

以下に、第1期から第3期の主な研究の題目と概要を紹介する。

2-1 第1期：中級話者を対象とする研究

「日本語中級者における発話分析－ACTFL-OPI基準の具体化を求めて－」（伊藤他1996）

この研究では、OPIテストから得たデータをACTFL-OPIの評価基準と照らし合わせ、特に中級を中心に日本語非母語話者の特徴を分析したものである。分析するにあたり、まず、初級－上～上級－下の典型と見られるテープを選び出し、その後、テキストの型、総合的タスクと機能、文法における正確さを記述的・数量的に分析した。

分析を進める上で応答発話の問題点を明らかにするために、まず、全被験者が共通して話している「今後の予定」に関する話題について取り上げ、各レベルにおける言語使用の特徴を概観してから、文の産出力、節の種類、段落構成力、難易度別のタスク成功率、ロールプレイの処理の仕方、テンス・アスペクト・助詞等の使用数と誤用率、動詞の異なり数などについて詳しく分析していった。

その結果、中級では、全ターンの70%を文で構成するなど、安定した文産出ができることが数値的に確認され、平均23%の複文使用など、初級(2%)とは大きな違いがわかった。ただ、段落構成の準備的な段階を示す準段落と連文の多用も特徴であることが明らかとなった。そのほか、自発性は中級－中から主に見られるようになることや、誤用の点から見て、テンスよりアスペクトのほうがレベル差を特徴的に示していることなど、文法の誤りが目につくというOPI基準での中級の特徴を具体的に確認することができた。

2-2 第2期：上・超級話者を対象とする研究

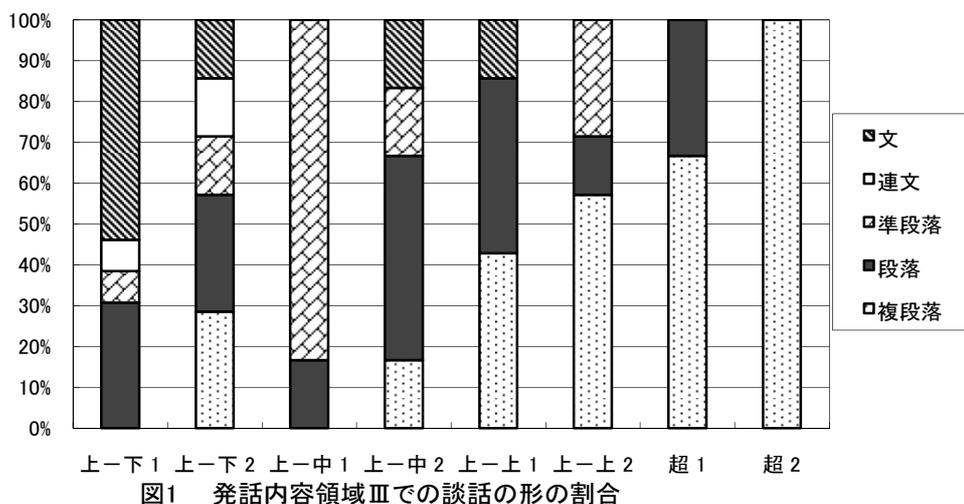
「上・超級日本語学習者における発話分析：発話内容領域との関わりから」（荻原他2001）

この研究では、上・超級話者の発話の特徴を明らかにすることを目指し、OPIテストの録音テープから、超級、上級の上・中・下の各々の典型的なもの(各2本)を選んで分析対象とし、母語話者(2本)とも比較した。

まず、話題の種類と述べ方から発話内容領域という概念を設けた。発話内容領域とは、話題の範囲、日常遭遇する機会の多少、対応に必要とされる言語活動の複雑さ・言語知識の多少、述べ方の抽象性を基準として類別した言語活動の領域のことをいう。それを3つの領域(I. 身近な具体的事実を直接的に言う、II. 個人的一般的関心事の具体的事実を詳述する、III. 抽象的内容を論じる)に分けた。この発話内容領域を軸として、各被験者の発話について、試験官の要求への対応の仕方・発話の構成・談話の形・文法能力(語彙の広がり、誤用、言い直し、接続表現)を分析し、上・超級話者の各レベルの発話の特徴を具体的に示した。

その結果、特に、発話の構成には明らかな違いが見られた(図1)。超級話者の場合は、意見述べにおける発話構成力(複数の観点から階層的な論理展開)があり、自分自身や一般的な話題について具体的に複雑でない構造を使って話すことが期待されている話題においても複段落を60%の割合で構成している。

それに対して、上級話者の場合は、社会問題などについて、複雑な言語形式や構造を使って意見を述べたり、現象、概念などを説明したりすることが期待される質問において発話構成力に問題(的外れな答え・論理的飛躍や途切れ・意味の曖昧性)がある。そのうえ、このような質問に対しては、準段落も見られることがわかった。



また、上級から超級への移行の過程が明らかになり、全分析項目においてなだらかな発達がみられるわけではなく、発話の構成・抽象的表現の使用・言い直し・接続表現・誤用などの項目では、上級と超級で大きな違いがみられた。また、発話内容領域によっても、レベル差が大きく現れる項目が異なっており、発話内容領域Ⅱでは、タスク達成、談話の形について上級-下と上級-中との間に明らかな差が、発話内容領域Ⅲでは、談話の形について上級-中と上級-上の間で大きな差がみられた。これらの結果から、いくつかの分析項目では、ACTFL-OPIの基準で示されているレベル変化とは異なる、大きく変化する段階があることがわかった。

さらに今回行った母語話者との比較から、超級話者のほうが母語話者より論理的に話したり、和語を多く使用したりすることが認められた。

2-3 第3期：研究成果の日本語教育への応用

「中級話者への会話教育の指針—OPI レベル別特徴の分析から—」(荻原他 2003)

「上級話者への会話教育の指針—OPI レベル別特徴の分析から、まとまりの欠如に焦点をあてて—」(荻原他 2004)

中級話者への会話教育の指針として、第1期の研究をもとに、7つの問題点(①ロールプレイにおける自主的な会話の構成力が欠如している。②文産出はできるが、複文が少ない。③連体飾節・引用節が少ない。④「段落」より「準段落」が多い。⑤アスペクトの誤用が中級-下まで多い。⑥明確化の聞き返しストラテジーは、中級-上以上のみで使用されている。⑦自己訂正のストラテジー使用の際、同じ語彙の繰り返しがなされる。)が挙げられた。これらの問題点を克服することが上級を目指す上で養成すべき能力であると捉え、わかりにくさの解消、聞きにくさの解消が大きな目標として考えられた。

わかりにくさの解消には、タスク・話題ごとの発話項目の明確化やタスク・話題に応じた発話項目の順序の明示が必要であり、また、聞きにくさの解消には、同一語彙の繰り返返

しからの脱却が必要であることを示した。

次に、上級話者への会話教育の指針については、超級話者との比較で注目された問題点を上級話者に対して養成すべき能力ととらえた。

上級話者の問題点は、すべての話題において見られるわけではなく、教育問題、環境問題などの社会的な話題など、複雑で、現象や概念などを説明する際において見られ、大きく次の3つの問題点が認められた。

まず、1点目はまとまりの欠如である。超級話者の場合、社会的な話題などについて複雑な言語形式や構造を使って意見を述べるのが期待されている場合に、複数の観点から階層的な論理展開で、直裁的な論理性を持って説明することができる。それに対して、上級話者は、的外れな内容を話してしまったり、論理的飛躍や意味の曖昧さから、論理展開が不明確になったりするという特徴が見られた。

2つ目の問題点として、抽象性の欠如が挙げられる。超級話者は、同様の話題について話すとき、具体的にも抽象的にも裏づけしながら話せるのに対し、上級話者は、具体例のみによる裏づけしかしておらず、また、概念的な内容に対しても、具体的にしか返答していなかった。

3つ目の問題点としては、円滑さの欠如がある。上級話者は、多様なストラテジーを使って言い直すことで、言語的に不足している面を補っているのだが、超級話者と比較すると、その言い直しの多さが、かえって聞き手にとっては聞きづらさに繋がっている面があり、文法力・語彙力の養成も、一つの課題だとわかる。

このような結果から、上級話者ができなかったことを、これからの会話教育の目標とし、特に、まとまりの欠如に焦点を当てて、会話教育では話題に応じた談話構成を明示的に示すことの重要性について提案した。

2-4 第4期：コミュニケーション能力を養成するための教科書作成

『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現—』(荻原他 2005)

『日本語超級話者へのかけはし—きちんと伝える技術と表現—』(荻原他 2007)

ガイドライン研究班の第1期～第3期までの研究内容を受けて、それらの知見を現場の日本語教育に生かすため、話技能に特化した教科書作成を行った。第3期に明らかになった各レベルで不足している能力を養成するということに注目して、ACTFL-OPI 中級から上級を目指すための教科書と上級から超級を目指すための教科書の2冊を作成した。

それぞれの教科書では、各課に3つの目標を明示し、それらを学習者に意識化させることを心掛けた。上級を目指す教科書では、①コミュニケーションの機能上の目標、②ストラテジー・談話構成・文法上の目標、③コミュニケーションの人間関係上の目標を掲げ、超級を目指す教科書では、①コミュニケーションの機能上の目標、②効果的で効率的な話し方を目指す上での目標、③人間関係を考慮したコミュニケーションのストラテジー上の目標を掲げた。

これらの目標のうち、いずれの③の目標も、ACTFL-OPI が目指している論理的でわかりやすい話し方の必要性に加え、異なる考え方や感じ方を認め尊重しながらお互いの考え方を伝える姿勢の重要性を示し、心理学やコミュニケーション論などの考え方を盛り込ん

だものになっている。話し手としてだけでなく、聞き手としての役割も意識させて、よい話し手・聞き手であることが対人コミュニケーションに必要であるという考えのもとに作成した。

3. ガイドライン研究班の今後

ガイドライン研究班がプロジェクトとしての活動を終了して、すでに6年が経過している。その研究活動は、概観した通り、ACTFL-OPI の評価基準によって判定された被験者の口頭運用能力をより分かりやすい形で示そうという試みであったと思う。

文産出能力や語彙の豊かさなどについては数値的に示し、話のまとまり方については準段落・段落等についての定義の明確化をした上で図により談話の型の構成比率を示し、また、タスク達成度については発話内容領域ごとにフローチャート化した上で詳細に分析することで記述的に示した。口頭運用能力には様々な要素が含まれており捉えにくいものであるが、このように様々な形態で明示化することに努めてきた。これまでの調査・分析を通して、より話技能におけるレベルとはどのようなものなのかについて考えさせられたように思う。

各レベルにおける口頭運用能力の全容を解明するためには、まだまだ研究対象として取り上げるべきものがあり、少しずつではあるが、元メンバーの一部で研究(荻原・齊藤 2008)を続けている。

こうした研究により得た知見は、研究だけにとどまらず、実際の日本語教育に貢献できるものでありたいとガイドライン研究班創立当時からメンバーは考えてきた。その現れとして教科書作成も行ったが、今後もその姿勢は変わりなく、研究班がなくなった今でも、そして今後も、メンバーそれぞれの研究や教育の中で生きていくものと考えている。

注

- (1) 現在退会しているメンバーは、北澤美枝子・堀歌子・増田真佐子・米田由喜代である。
- (2) 内容的な統一はあるが、論理的展開・構成が明確でないもの、または、文法的な誤りや未熟な表現があるため意味・内容の明確さに欠けることから、段落になりきれしていない発話のことをいう。

参考文献

- 伊藤とく美・荻原稚佳子・北澤美枝子・齊藤眞理子・堀歌子・増田真佐子・米田由喜代 (1996) 「日本語中級者における発話分析—ACTFL-OPI 基準の具体化を求めて—」『JALT 日本語教育論集』第1号, 79-99, 全国語学教育学会 日本語教育研究部会
- 荻原稚佳子・齊藤眞理子・増田真佐子・米田由喜代・伊藤とく美(2001) 「上級・超級日本語学習者における発話分析—発話内容領域との関わりから—」『世界の日本語教育』第11号, 83-102, 国際交流基金日本語国際センター
- 荻原稚佳子・米田由喜代・齊藤眞理子・増田真佐子・伊藤とく美(2002a) 「日本語学習者の口頭運用能力における発話のまとまり方の諸相」『日本語 OPI10 周年記念フォーラム報告書』51-64, 日本語 OPI 研究会

- 荻原稚佳子・齊藤真理子・伊藤とく美(2002b)「日本語 OPI に見られるストラテジーの使用について」『エディンバラ OPI シンポジウム予稿集』41-46, J・OPI Europe・関西 OPI 研究会・ACTFL
- 荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子(2003)「中級話者への会話教育の指針—OPI レベル別特徴の分析から—」『ソウル OPI 国際シンポジウムプロシーディングス』49-53, 韓国 OPI 研究会・建国大学校教育研究所
- 荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤真理子・増田真佐子(2004)「上級話者への会話教育の指針—OPI レベル別特徴の分析から、まとまりの欠如に焦点をあてて—」第 12 回プリンストン日本語教育フォーラム プリンストン大学
- 荻原稚佳子・増田真佐子・齊藤真理子・伊藤とく美(2005)『日本語上級話者への道—きちんと伝える技術と表現—』スリーエーネットワーク
- 荻原稚佳子・齊藤真理子・伊藤とく美(2007)『日本語超級話者へのかけはし—きちんと伝える技術と表現—』スリーエーネットワーク
- 荻原稚佳子・齊藤真理子(2008)「意見述べについての一考察—『難しい話ができる』とはどういうことか—」『日本語教育学会世界大会 2008 予稿集 2』263-266, 第 7 回日本語教育国際研究大会 日本語教育学会